

呼称から見た『篁物語』の段落構成

——「せうと（兄）」「男」の相補分布——

安部清哉

論文要旨

本稿は、『篁物語』（『篁』）における主人公の呼称「せうと（兄）」「男」「篁」「大学のぬし」「人」のうち、特に、「せうと」「男」の混在に焦点を当てて考察する。その使い分けの意味を、部分的典拠作品（特に典拠のひとつと推定された『伊勢物語』と漢籍類）との関係から解釈してみようとするものである。「せうと」を使用する場面は、「男」を使用する部分とは別に、時期的に少し後の段階に構想ないし創作され、「男」を使用していた部分と統合されて現『篁物語』となったものである蓋然性が高いことを指摘した。

キーワード 『篁物語』、「せうと」、源順、段落構成、『伊勢物語』
三十九段・四十一段

【目次】

- 1 はじめに——呼称から見る物語
- 2 『篁物語』の「せうと」（兄）と「男」との相補分布
- 3 先行研究——森中京子（1961）『兄』『学生』という語のイマ

ジェリー

- 4 「せうと」が現れる位置——2例以上連続での3場面
- 5 第I部終結部（妹の死後の場面）における「せうと」（③の2例）

- 6 「せうと」2例連続箇所の共通性——漢籍との関係——

- 6-1 連続2例（②場面）と『蒙求』『陸続懐橘』および『伊勢物語』四十一段

- 6-2 連続10例（①場面）と『伊勢物語』四十一段

- 6-3 連続2例（③場面）と漢籍類の招魂儀礼描写

- 7 むすびとして——②の「男」部分における「法華経を書きて」

- 7-1 「せうと」偏在のまとめ

- 7-2 「法華経を書きて」と『書』（漢才）というテーマ

- 【資料】『篁物語』の「せうと」のある場面

1 はじめに——呼称から見る物語

『篁物語』は、平安時代前半の終わり頃、10世紀末に成立したと推定される作品である(安部(2017:3)・安部(2018:6)、村田菜穂子(2005))。小品であるが、『源氏物語』への影響も確認され、日本文学史資料、日本語史資料として重要な位置を占める。さらに、その場面・段落構成を分析していくと、文章史の上でも歌物語と作り物語の両方をつなぐ興味深い特徴を見出すことができる(安部(2019:3))。

その場面・段落構成の特徴は、指示代名詞、接続詞、典拠作品との関連部分等のほか、その呼称にも現れている。『篁物語』の中には主人公を指す語彙として、「せうと(兄)」「おとこ(男)」「篁」(大学の)ぬし」「人」(以下、「呼称」と総称する)の5語が使用されている。そのうち、特に「せうと」が使用される場面には興味深い傾向が認められる。本稿では、『篁物語』の段落構成を分析し、文章・文体史上における位置付けを考察する研究の一環として、その呼称を取り上げることにする。

2 『篁物語』の「せうと」「兄」と「男」との相補分布

『篁物語』(以下、『篁』と略記)には、主人公である小野篁に対

する呼称が、5種使用されている。これまでの研究でも、それらの使い分けが問題にされることもあった。物語の構成が前後2つの話に分れていて(本稿では、第一部、第二部と表記していく)、それぞれの中での使用傾向がはっきりしていないこと、主人公の篁が「男」と呼ばれる一方で、その恋敵として登場する兵衛佐にも「男」が使用される部分があること、特に「せうと」と「男」の使用が混在しているようにも見えること、などから、使い分けの意図と使用場面の相違などが問題として取り上げられることもあった(後述)。これら5語の使用回数は次の通りである。(頻度順)

せうと(兄) 14回、男 14回、篁 4回、(大学の)ぬし

(主) 3回、人(普通名詞ゆえ篁を指す回数はいま不問)

注Ⅱ 「男」は兵衛佐に対しても4回使用される。「(大学の)

主」は、童・妹・母親のいずれも会話文中に各1例。

本稿では、例数が少ない「篁」「(大学の)ぬし」および普通名詞の「人」はひとまず置いて、「せうと」と「男」の配置を問題とし、特に「せうと」の出現部分に焦点を当てて検討する。また、行論を簡潔にするため、結論的な見方を先取りして説明の手順を述べれば、「せうと」の現れる箇所(一定の傾向があるので、「せうと」に特に焦点を当てて考察していくことにする)。

なお、今回割愛した「篁」(4例)に触れておけば、第一部の2例は共に会話文中での使用であり、第二部での2例は共に地の文に

あつて、第Ⅰ部と第Ⅱ部とで傾向が異なることが指摘できる。

なお、以下では、「せうと」は「兄」あるいは括弧を外した兄と表記する場合もある。作品名は『篁』『源氏』のように略記し、時に簡条書きの記述中では括弧も略す場合（篁、多武峰）がある。

『篁物語』本文は日本古典文学大系本（彰考館本）により、本文の異同箇所は書陵部本、承空本も考慮しつつ諸注釈を勘案した。

3 先行研究——森中京子（1996）『兄』『学生』という語のイメージリー

先行研究で、特に呼称を問題にした論文には次の森中京子（1996）がある。森中以外にもこの問題に断片的に触れた論もあるがここでは省略する。

○森中京子（1996）『兄』『学生』という語のイメージリー

——『篁物語』小考』『緑岡詞林』20

森中氏は、文学的視点から特に「せうと」「男」「大学のぬし」「篁」を検討し、次のように呼称の相違を説明している。

「これらの用例を総合することによって、『篁物語』主人公のキャラクターを大まかに説明することが出来よう。「恋ゆえに苦しみ、その思いを歌を詠む『男』」、「妹に対して、親しげに、あるいは年長者らしく振る舞う『兄』」、「いまだ官職に就かず、一人前の身とは言えない『大学』の学生」「非凡な文才を有し、

後に地位と名望を得る『篁』——これらの要素の集合体が、『篁物語』の主人公像なのである。」

そして、「まとめ」として、「和歌」と「漢文」という素材を複合させることで、

Ⅰ「学生である篁と異母妹の悲恋」「学生である篁と、妻・右大臣三君との結婚生活」という虚構が生まれ得た。」

と、そのテーマ設定をまとめ、次いでⅡとして、

Ⅱ 物語本文では主として、主人公・篁の（恋や結婚をする）男」（異母妹に対する）兄」としての姿が描かれている。」

とする。そして、呼称の「せうと」と「男」の使い分けは、物語の主題の二面性と密接に関係していて、

「そのモチーフ【引用者注：和歌と漢文】と主人公像の両方に「兄妹」「学生」という語のイメージの肥大あるいは拡散が認められる。」

と、主人公の「イメージ」「要素」の拡大が、呼称に投影している」と解釈している。

このような「兄（せうと）」と、「学生」あるいは「男」という主人公の二面性（多面性）はこれまでも指摘されていて、呼称の使い分けの要因の一つかもしれない。しかし、本文中における「せうと」の出現位置の偏りについては特に問題とされていない。

4 「せうと」が現れる位置——2例以上連続での3場面

『篁』の「せうと」は、主人公である「篁」(小野篁)を指して使われる。この「せうと」は、第一部に登場している異腹の妹との関係での呼称である。それゆえ、妹が出ていない第II部では使用されず、第一部だけでの呼称である。

さて、まず「せうと」が使用されている箇所を把握しておくことにする。以下のような3つの部分にだけまとまって現れている。該当する箇所がわかりやすいように、以下に該当する場面ないし段落に仮称を添えて示す。

① 10例の連続箇所(第一部)

① a 兵衛佐の登場する場面「兵衛佐横恋慕譚」(9例)

① b ① aの直後の別場面(1例)——「妹懐妊段落」の前半の「兄妹心通ひ場面」で、その最初に主人公に言及する箇所。その後は「男」に戻る。

② 2例連続箇所の1番目(第一部)——「春の橋」が話題となる部分(「春の橋」章段)

③ 2例連続箇所の2番目(第一部の末尾)——「妹亡霊譚」のうち「葬送・招魂／法華経・結語」部分

これらの「せうと」が現れる位置には傾向がある。まず、「せうと」は「男」の使用場面と相補的な分布をなしているように見える。そして、「せうと」の現れている場面やそこでの表現の特徴を整理すると、全体として、次のような傾向が認められる。

(以下では、「兵衛佐横恋慕譚」の場面において、兵衛佐を指して使われる「男」や、一般称としての「男」は考察対象から除外する。また、同じくそこでの会話文中で(篁および兵衛佐の発話)、一方の男を指して使用されている「男」2例を除く。後者の「男」の2例は具体的には、①篁の会話文中で兵衛佐を指して使われる1例、②兵衛佐の会話文中で篁を指して使われる1例である。)

ア 「せうと」(14例)は、主人公(小野篁)を指す呼称としては、必ず2例以上連続して現れている(10例、2例、2例の3箇所に分かれる)。1回の使用だけで前後が他の呼称に変わっているということがない。——使用部分に内容的連続性があるということになる。

イ 「せうと」は、「男」の使用とは、ある種の相補分布をなしている。「せうと」の連続使用場面では、意図的に(？)、「男」(小野篁を指す場合)の使用が回避ないし排除されているように見える。——「男」とは意図的に使わけていられるということになる。(兵衛佐を指す「男」はいま別にしない)

ウ 「せうと」のその連続使用箇所は3箇所にわかれている(上

記のように、10例(9+1)、2例、2例)。言わば、全体として「せうと」使用の3場面を構成している。——「男」の方(イの相補分布傾向があるので)、「せうと」場面以外の4箇所(ア)の範囲にあるとも言える(「篁」ほかの使用箇所はいま別にする)。

エ 第一部にだけ現れ、第二部では使用されていない。——第一部のみでの人称。

(ウの補足Ⅱ詳しくは後述するが、9例連続する箇所は、内容上、まず9例で一つのまとまりのある話「兵衛佐横恋慕譚」となっており、その直後のそれに連続する1例は、直前の場面を受けた別の一場面の冒頭部に現れている。それは、続く次の場面において最初に主人公を指すための1例である。前の段(「せうと」使用)との話をつなぐ役割を持つ1例ということにもなっている。)

このような「せうと」使用の特徴は、これまでの研究では十分把握されてきていない。上記の特徴は、もし仮に、「せうと」の連続使用3箇所の話(ア)に、何か共通する特徴や性質が見出せれば、少なくとも「男」使用箇所との質的相違を見出せる可能性があることを示唆している。これが本稿で取り上げる所以である。

以下では、「せうと」が連続して使用されている上記①②③の3箇所について、その特徴を考察する。なお、指摘した「せうと」の

使用箇所の本文は、本論末尾に資料として掲載しておく。

「せうと」が連続して使用される3箇所のうち、まず、一番最後に2例連続して現れる③の第一部終結部を取り上げることにはしたい。

それは、他の2箇所を検討する前に、先人観なくこの部分の問題を検討しておきたいからである。実は、①と②にはいくつかの共通点がある。その共通点を先に見てから③の検討を行うと、ある種の先人観を持って見る(見られる)ことにもなりかねない。それを回避しておくために、取り上げる順番を出現順とは別にしておくことにしたい。

5 第一部終結部(妹の死後の場面)における「せうと」 (③の2例)

最初に、「せうと」が連続して使用される3箇所のうち、最も後に2例連続して現れる第一部の終結部を取り上げてみたい。

その2例は、第一部終結部の「妹亡霊譚」における妹の供養の場面に現れる。主人公である篁Ⅱ兄が、親に代わって葬送の儀を執り行う場面である。身内としてそれを行うという意味もあるためだろう(1例)に戻って第一部が終わる。つまり、この短い場面で「男」兄Ⅱ男と変化して、最後は「男」で第一部が終わっている。以下に当該部分を、その直前部分(妹が和歌を詠んで死ぬ場面)からの続きがわかるように引用しておく(「せうと」2例がある段落を枠

で囲んでおく。

◆第一部の終結部（妹（女）の死の直後の場面）

泣くくさぐされば、手にもさはらず、手にだにあらず。ふところにかき入れて、わが身のならんやうもせず、臥さまほしきことかぎりなし。

【兄】泣き流す涙の上にもさらぬあはの山かへる女、返し、

常に寄るしばばかりは泡なればついに溶けなんことぞ悲しき

といふ程に、夜のあけにければ、なし。

【こゝまでの場面は、妹の魂の来訪と別れの場面。この直後が次の③の場面。】

③「せうと」2例連続場面【妹の「葬送・招魂」の場面】

親はすてて去にければ、とかくおさむることは、たゞこの兄ぞ、しける。

人はみな、すててゆきにければ、たゞこの兄、従者三人・学生一人して、この女を死にける屋を、いとよくはらひて花・香たきて、遠き所に、火をともしてゐたれば、この魂なん夜なく来て語らひける。

三七日は、いとあざやかなり。
四七日は、ときく見えけり。

【以下は、上記に続く「法華経供養・後日譚」の場面】

この男、涙つきせず泣く。その涙を硯の水にて、法花経を書きて、比叡の三昧堂にて、七日のわざしけり。

その人【妹の霊】、七日は【四十九日は】なしはてても、ほのめくこと絶えざりけり。三年すぎては、夢にも、たしかに見えざりけり。

なを悲しかりければ、初めのごとてなん、まかせたりける。妻にも寄らで、ひとりなん、ありける。

短い場面であるが、③を含む前後場面は「妹の葬送・招魂」と兄の「法華経供養」が続く一連の場面の一部である。③の「せうと」2例は、そのうち、葬送の儀式と妹の魂の再訪を描写した部分に現れる（枠を付けた部分）。その後、主に「男（兄）」が行う法華経供養と独身を続ける様子という場面へと続いている。

そのように「妹↓兄」という描写視点の相違も読み取れるうえに、「葬送・招魂」場面では、妹を捨てて去った「親」との対比で血縁としての「せうと」が使われ、ついで「人（家の使用人）」との対比で、その家の「せうと」が使われている、というように、立場を示す意味で兄「せうと」が使用された、ということも言える。

一方「法華経供養」場面では、女の死を嘆く恋人としての「男」に着眼があり、同じ七日毎の供養を描写していても、「妹」の恋人であり妻も娶らない男が主題であるので、「男」が使われている、

とも読み取れる。そのような視点の相違を読み取った解釈をすれば、「せうと」から「男」という呼称の変化自体には、内容上大きな問題は無いようにも見える。

しかし一方で、この場面には次のようなある種の違和感がある。それは、特に「葬送・招魂」場面に集中している重複表現（カ・キ・ク・ケ）、および、「葬送・招魂」場面を間にしたその前後部分の連続性（コ・サ）の問題である。

カ 「すてて去にければ」「すててゆきければ」という、妹を捨てていった同じ表現の繰り返し。

キ カの直後の「ただ、せうと」「ただ、せうと」という、やはり同じ表現の繰り返し。

ク 「三七日（二十一日）の法要および四七日（二十八日）の法要」のことで、後の「法華経供養」場面での「七日のわざ」（七日毎の法要）および「七日はなしはしても」（七七日四十九日の法要を終えても）との繰り返し（あるいは話の「逆戻り」現象（石原昭平（1977）の指摘））。

——これも二つの別パターンでの未推敲草稿を想起させる。

ケ 「従者三四人」の言い方と、第一部の前半部分（「兵衛佐横恋慕譚」）の「男の童三四人」という類似表現との重なり。

——これらは執筆段階（時期）の近さによる同一表現の繰り返し

し使用を想像させる。「兵衛佐横恋慕譚」は後の段階の挿入が考えられる。

コ 「せうと」段落とその前後部分との表現の断絶。

——この直前の「妹の魂の来訪」場面から、「男」が「涙」を流して「泣く」表現が連続して多く現れている。しかし、上記の「葬送・招魂」場面だけは「泣く」「涙」語彙が全く現れない。描写・表現がそこだけ前後とは異質に見える（安部（2019.3））。

サ 「葬送・招魂」場面（梓の部分）を削除して前後をつないでも、話が連続的につながり、それだけでも完結するように（も）読めること。

これらのうち、カ・ケについては、未整理の草稿が残ったものと見れば、『篁』全体がやや語句の不整合箇所が見られて未完成作品とも見られる要素が少なくないため、それゆえの冗漫な繰り返ししないし未推敲箇所とも見えなくもない。しかし、異質性に目を向けて読んでみるとやはり気になる繰り返し表現である。

上記の諸点について、以下に少し補足する。

カ・キは、「親はすてて去にければ、とかくおさむることは、たゞ、この兄ぞ、しける。」とあるので、続く家の使用人について「人はみな、すててゆきにければ、」を繰り返し記載せずとも、この兄が「おさむること」は全て執り行ったことがわかるはずである。

それゆえ、「たゞ、この兄(せうと)」の繰り返しからみても、「親はずて去にければ」とかくおさむることは、たゞ、この兄ぞ、しける。」の別バージョンとして、「人はみな、すててゆきにければ、」部分を改めて別に書いてみたようにも見える。あるいは、例えば「親も人もみなすてて去にければ、たゞ、この兄(せうと)、従者三四人・学生一人して、この女を死にける屋を、いとよくはらひて、」等を意図した推敲過程での重複にも見える。

特にクの「七日毎の法要」における重複の印象は、先行研究でも「逆戻り」箇所として問題にされている。この点を最初に指摘したのは、石原昭平(1977)である。

「この一節【引用者注：この男、涙尽きせず泣く〜】は、前の文章が、三七日、四七日と仏事の日を重ねているにもかかわらず、『七日のわざしけり』と逆戻りするのみに見える。それは、前の文章が、魂の現われて筆と語る日々であり、この一節は現実の仏事を営んでいることを意味するものだからであろう。ここで始めて筆は世俗の仏事を営むのである。」(184頁、傍点原文ママ、傍線引用者)

そこでは「仏事の日を重ねているにもかかわらず、(中略)逆戻りするのみに見える。」とされている。平野由紀子(1988)も「逆戻りするのみに見える点」として石原氏の指摘を挙げつつも、解釈については石原説を紹介するにとどめる。

石原氏は、その理由を、「葬送・招魂」場面は「筆と語る日々」

であり、それに対して「法華経供養」場面は「現実の仏事」を表すとする。原文に合わせてひとまず解釈をつなぐならば、ということでもあろう。

確かに「せうと」と「男」の交錯など、上記したことすべてを違和感があると見るのは、現代人的論理的構成による味方に過ぎず、これらは古典的描写展開あるいは未整理ゆえの不整合箇所、ということにしておいても解釈可能なような、軽微な違和感かもしれない。

しかし、敢えて石原氏のあげた解釈への疑問を挙げておくならば、少し前には「夜なく来て語らひける。」とあり、ほぼ夜毎に現れは語りあうように書かれているのだから、三七日の二十一日の供養、四七日の二十八日の供養の日(のみ)に「筆と語る」ことを敢えて日付けを記して表している法要(の日)と、「法華経供養」場面の「現実の仏事」の日を表す「七日」毎の法要とは「別である」というのはやや無理があるようにも思われる。

むしろ、「夜なく」夜毎に現れて語らっていたが、「三七日」「四七日」の法事が重ねられるに従って(供養の佛力によって)その姿があの世の世界へと次第に送り出されていることを暗示するため、「いとあざやか」だった様子から「とき／＼見え」る程度へと、あたかも頻度が減り妹の影が次第に薄れていくことを生々しく表現することに力点がおかれた文章と映る。それゆえ、三七日・四七日と日かすを示す部分も、やはり「現実の仏事」があつた日々を(後半の「法華経供養」場面と同様に)表していて、即ち「七日のわざ

しけり」はやはり「逆戻り」したかのような重複描写になっていると思われるのである。

次はケ「従者三四名」と「男の童三四人」との類似である。ただか「三四人」という数字の一致ではあるが、数的発想の一致として注意される。「男の童三四人」がある「兵衛佐横恋慕譚」部分は、『篁』の初期構想段階よりもやや後に『伊勢物語』を発想の一つとして創作された、と解釈された(前稿・安部(2018))。そのような部分と類似がある「せうと」部分は、その前後部分よりも、時期的に後の段階で構想された可能性が出てくる。

次にコについて、『篁』はその典拠の一つとして定説となっている『古今和歌集』哀傷歌・八二九番の「妹の身まかりにける時詠みける 小野篁朝臣 泣く涙雨と降らなむ渡り川 水まさりなば帰りくるがに」に拠る物語である。そのため上記引用部分前後から終わりにかけては、特に「泣く」「涙」語彙が多いことはすでに多く指摘されている(早くは山口博(1986)、最近のものでは中村祥子(2009)など)。しかし、「せうと」使用部分には「泣く」「涙」等の表現は全くない。「せうと」段落の直後には(「法華経供養」場面)、「この男、涙つきせず泣く。その涙を硯の水にて」「悲しければ」と再び「泣く・涙」表現の連続性が認められる(詳しくは安部(2019.3)も参照)。

この前後での「泣く」「涙」の連続を、具体的に次に示しておくことにする。

◆ 「泣く」「涙」と縁語が連続する第I部最後の部分

「とて、よろづのことを言ひて泣けど【篁】、答へせずなりにければ、「死ぬ」とて泣き騒げば【篁】、声を聞きて、ときあけて見れば、絶へ入るけしきを見て、まどゐ出て、ほかの家に去にけり。

親出でてのちに、ゐで、率て入りて、見れば、死にて臥せり。

泣きまどへど【篁】かひなし。

その日のようさり、火をほのかにかきあげて、泣き臥せり

【篁】。あのかた、そゝめきけり。火を消ちて見れば、そひ臥す心ちしけり。死にし妹の聲にて、よろずの悲しきこと【妹】を言ひて、泣く声【これは妹】も言ふとも、たゞそれなりければ、もろともに語らひて、泣く【篁】さぐれば、手にもさはず、手にだにあらす。ふところにかき入れて、わが身のならんやうもせず、臥さまほしきことかぎりなし。

【篁】泣き流す【涙】【篁】の上にあらしにもさらぬ【泡】の山かへる【下句は「さらぬわかれに泡のうかべる」他が推定されている(遠藤(1964)大系本)、西木忠一(1979)、呉羽長(1986)など参照】

女、返し、

【妹】常に寄るしばばかりは泡なればついに溶けなんことぞ悲しき

といふ程に、夜のあけにければ、なし。

親はすてて去にければ、とかくおさむることは、たゞ、この兄ぞ、しける。

人はみなすててゆきにければ、たゞ、この兄、従者三四人・学生一人して、この女を死にける屋を、いとよくはらひて、花・香たきて、遠き所に、火をともしてゐたれば、この魂なん、夜なく来て語らひける。

三七日は、いとあぎやかなり。
四七日は、とき／＼見えけり。

この男、涙つきせず泣く【篁】。その涙【篁の】を覗の水にて、法華經を書きて、比叡の三昧堂にて、七日のわざしけり。その人【妹の霊】、七日はなしはてても、ほのめくこと絶えざりけり。三年すぎては、夢にも、たしかに見えざりけり。
なを悲しかりければ、初めのごとしてなん、まかせたりける。妻にも寄らで、ひとりなん、ありける。

篁の「泣く」「涙」語彙のほか、妹が主体の「泣く」2例、さらに縁語の「悲し」「流す」「水」「泡」「溶ける」をも考慮すると、この場面が「泣く」「涙」や縁語の「水」語彙を描写の中心に据えている箇所であることがよくわかる。まさに「妹の身まかりにける時

詠みける——泣く涙雨と降らなむ渡り川 水まさりなば帰りくるがに」を想起させるような、1行毎に1語程の頻度（大系本本文）でそれらの語彙が現れている『泣く涙 尽くし』の場面なのである。

しかし一方で、「せうと」が使われている描写部分の間には、あつてもよさそうな水や涙の比喩さえ1語も描かれてはいない。その数行だけは前後との連続性が断ち切られているように見える。

次にサについて言えば、「せうと」部分（上掲の2文字下げ小文字部分）を抜いた前後の話がつながるといふこと単独で判断の根拠になる、と単純に考えているわけではない。しかし、総合的に判断していく場合の一つの観点にはなるであろう。

あるいは、「せうと」のある中間部分を削除してしまうと、最後の方に「ほのめくこと絶えざりけり」とある、魂の訪問の部分が唐突に出てきて理解しにくくなるのではないかと、と思われるかもしれない。しかし、上記引用部分の前半には、妹の魂の来訪のことが、既に「あとのかた、そゝめきけり。火を消ちて見れば、そひ臥す心ちしけり。／＼と描かれている。そこを受けて「ほのめくこと」が続いているとも理解できるであろう。この「そそめく」と後での「ほのめく」とは「めく型動詞」による類義表現があえて使われて呼応しているから、「そそめく」の場面との連続性は、十分理解可能であろう。（「その人」という表現も、現実には生きている人間では

なく、妹の魂（亡霊）が表現されているので、婉曲な表現としての「その」が使用されていると解釈される。）

以上、このように見てくると、「せうと」の使用箇所は、その後とのつながりに関してやや問題となる要素を持つてることがわかる。次節では、他の2箇所の連続使用部分を検討してみる。

6 「せうと」2例連続箇所の共通性——漢籍との関係——

6-1 連続2例（②場面）と、『蒙求』『陸続懐橋』および『伊勢物語』四十一段

ここでは「せうと」が連続して使用されている上述の①（10例連続）と②（2例連続）の部分を検討してみる。まず、「せうと」2例が連続する②とした短い方の場面を検討する（原文は本稿末尾の【資料】参照）。

この2例が現れている部分は、橋の実と香を道具立てとして一つの場面を構成している。懐妊したためか（あるいは春という季節のためか）、妹が酸味のある「はなかうじ【花柑子】・橘【の実】」を好んだので、篁が大学の宴で供された「橘」の実、「二三」ばかりを「懐」に入れて「持ち帰って」妹に与える部分（前半||前半のみ次に引用）と、それに続いて、その橘に寄せて二人が共に「緑の衣」という篁の身分を象徴する言葉を詠み込んで、歌を詠み交わす部分

（後半）とからなる（「緑の衣」は五位・六位の朝衣を象徴するが、兄の篁を表す）。

「例の、さほりせず」

など、うたてあるけしきを見て、人く言ふ。

この兄も、『いとをし』と見て、春のことにやありけん、ものも食はで、はなかうじ・橘をなむ、ねがひける。知らぬ程は、親求めて食はせ、兄、大学のあるじするに、『みな取らまほし』と思ひけれど、二三ばかり、たゞみ紙に入れて、取らす。（中略）返事に、『御ふところにありければなん、（歌、下略）』

この箇所は、仁平道明（1395.12）よって、中国の『蒙求』の「陸続懐橋」（または、その元となっている『三国志』巻五十七・虞張駱陸吾朱伝第十二の「陸続」）の話が踏まえられていると指摘されていることを安部（2018.5）で紹介し、両話に共通する内容を改めて次のように確認した。

『女性（『篁』では妹／『三国志』によれば母、以下同様に示す）に供するために、男（篁／陸続）が、何かの「公的行事にて（大学の行事／饗応）」供された「橘の実（両話共通）」を「三つ（二三個／三枝）」、「懐にして持ち帰る（両話共通）」

つまり、「女性のため」「行事で供された」「橘の実」「三つ」を「懐へ入れて」「持ち帰る」という設定上の典拠がある箇所というこ

とになる。

さらに二人の歌に使われた「緑の衣」という表現は、『伊勢物語』四十一段で身分の低い方の男を象徴していた「緑衫ろくせうの上の衣きぬ」(六位の身分を表す)を典拠として創作されたもので、低位の男を表す共通の言わば道具立てであった(安部(2018:3))。つまり、この②の「せうと」2例が使用されている場面は、『篁』の中でも明瞭な典拠が指摘できる箇所の一つということになる。

6-2 連続10例(①場面)と『伊勢物語』四十一段

次に「せうと」10例が連続する①とした部分を検討する。それは、「兵衛佐」が恋敵として登場する、言わば「兵衛佐横恋慕譚」の部分の9例と、その直後に別の場面に展開した冒頭部の1例であり、連続している10例の部分である。

- ① a 兵衛佐の登場する場面「兵衛佐横恋慕譚」(9例)
- ① b ① aの直後の別場面の冒頭部(1例、その後は再び「男」に戻る)

まず① aを検討する。この「兵衛佐」が登場する部分は、以前からもその独立性が高いことが言われている。また、この部分を削除しても、後の展開に何ら影響もなく関連性も残らず、前後の部分は大きな齟齬もなく話がつながっていく(安部(2018:5))。

また、① aでは兵衛佐が「男」と呼ばれることになるために、その直前まで「男」と呼ばれていた主人公・篁が、必然的に別の呼称

が必要となり、親族名称の「せうと」に代えられたと解釈可能な部分である(この点も既に複数の指摘がなされているが略す)。

一方、「兵衛佐横恋慕譚」における「身分の異なる二人の男」という設定は、『伊勢』四十一段の設定と類似していた(安部(2018:3))。『篁』では、主人公・小野篁が大学の学生の身(多くは六位前後)であり、その恋敵として登場する兵衛佐の方は「時の大納言の子」という身分である。『伊勢』四十一段では、二人の男は恋敵ではないものの、一人は「あて(貴)なる男」、もう一方は「いやしき男のまづしき」男で緑の衣(六位の朝衣)を着るという、『篁』と同じ設定であった(男二人の恋人が「女はらから」同士という設定)。安部(2018:3)では① aについて、『伊勢』四十一段における「貴なる男」と六位の「賤しき男の貧しき」の設定の影響を受けたものと推定した。

① aでの「せうと」使用は、兵衛佐が「男」と呼ばれるためという理由が見出せる。一方、②についても、『伊勢』四十一段との関連性が見出せることは注意したい。共通する典拠を持つ部分であるゆえに、呼称にも創作段階の共通性が投影しているという可能性が疑われるからである。

- ① a 9例 『伊勢物語』四十一段(身分の異なる二人の男の対比構図の共通性)

- ② 2例 『伊勢物語』四十一段(身分の低い男の「緑の衣」という朝衣の共通性)

残る①bは、①aの「兵衛佐」の話とはうって変わって、再び女に漢籍を教えようとする別の場面になる（「れいの書読みに、『内侍になさん』の心ありて、親は書教ふるなりけり。」）。そのため、①aの直後であり、冒頭ゆえに、①aと同じ「せうと」が主人公であることを示すため、一度だけ「せうと」が使用されてから、再び「男」に戻っていくのだと言えなくもない。ここでは、ひとまず①bはそのような解釈を優先させて、①aの部分のみの問題に絞っておくことにする。（なお、①bの「せうと」が、①aの範囲を超えて次の場面に食い込んで現れた理由は、別の観点から見ると、①aとの統合段階における追記挿入の可能性としても解釈可能であるが（安部（2018.3）参照）、ここでは略す。）

ところで、①aには兵衛佐の登場という「せうと」使用の明らかな理由も見出されたが、一方で、①aと②とは『伊勢』という共通する典拠が認められた。そのような共通点から、先の③を見る時、③にも『伊勢』との共通要素が見られることに気づく。次節でそれを検討してみたい。

6-3 連続2例（③場面）と漢籍類の招魂儻礼描写

『伊勢』との関連性から改めて③の場面を検討してみたい。死んだ妹を「おさむること（葬送）」およびその妹の「魂の来訪」場面である③は、安部（2018.3）で検討したように、『伊勢』三十九段

の、皇女（崇子）の「御葬（おまへ葬送の儀）」とその「（魂の）不死」（歌「消ゆるものとは我れは知らずな」という内容と密接に関係しているように思われる。その点を改めて示すために、三十九段を少し説明しておくことにする。

『伊勢』三十九段は、源順（『篁物語』の原作者と解釈された）の祖父である源至にまつわる次のような歌謡話である。

「昔、西院の帝（淳和天皇）の第三皇女・崇子（たかいこ）の御葬送の夜に、その御殿の隣に住んでいた男が、葬送を見ようと思つて、女車に女と相乗りして出かけた。源至も御葬送を拝みに来たところ、その女車に懸想をし、顔を見ようとして螢を入れた。女の顔を見られないようにと、相乗りしていたその男は螢の火を消そうとしながら（「灯し消ちなむずるとて」）歌を詠んだ。それに対して至は、「灯火が消えても皇女様の魂が人（々）の心から消え去つたものとも、私は思いません。」という歌で皇女への気持ちを詠んでかわした。天下の色好みの歌にしては「なほぞ」（平凡だ、一説には、やはり名に負うだけの歌だ）という出来であった。至は（源）順の祖父である。」

『篁』と『伊勢』の三十九段とは、至の歌も含め、特に同語や類似表現が見られるわけではない。しかし、次の源至の和歌の下の句は注意が必要である。

「いとあはれ泣くぞ聞ゆる灯し消ち 消ゆる物とは我は知らずな」

皇女「たかい子」の「おほん葬の夜」に、その御霊は「消え去っていくものとは、自分は思わない」と詠んでいるのである。亡くなった女性の魂の存在を信じるその思想は、『篁』の妹の亡霊譚の思想とも共通する。

『篁』は、三十九段だけでなく、連続している四十段、四十一段と関連性があり、そして三十九段の場合には何よりも、原作者と推定された源順の祖父「至」の名がある章段であることが注目される。それらのことを考慮すると、この三十九段から、「おほん葬」（葬送の儀）や「思い続ける限りは消えない霊」（妹の魂）等の何らかのイメージを受け継いでいる可能性は十分に考えられる。

また典拠作品との関係でも③には特色がある。③の「この女を死にける屋を、いとよくはらひて、花・香たきて、遠き所に、火をともしてゐたれば、この魂なん、」における「屋を蔽い清める」行為、「花・香を焚く」行為、やや離れた場所に「火を灯す」行為は「招魂」の儀礼行為を表し、そこには何らかの典拠資料あるいは当時の儀礼的所作が投影しているのだろうという解釈が、従来からなされている。その中から、より多くの具体的資料を挙げている中村祥子(2006)の解釈を紹介する。

中村(2006)は、『白氏文集』「李夫人」(招魂の方策として香を焚く例)、『捜神記』巻二「李少翁」(火を灯しての招魂)、『韋氏子』(息子の招魂にあたり香を焚き燭を燃す)を挙げて、「以上の例を見ると、部屋を清め、火を灯し、花香を焚くという描写は、招魂儀礼

として、「一般的なものであり、表現として定着していたことがわかる。」(傍線引用者)としている。

ここでの描写——「この女を死にける屋を、いとよくはらひて、花・香たきて、遠き所に、火をともしてゐたれば、この魂なん、夜なく来て語らひける。」——は具体的であるだけに、何らかの典拠を投影している可能性も高い。中村氏の指摘は必ずしも直接的依拠関係を言うものではないが、この③場面も、②において仁平氏が『蒙求』を指摘したと同様に、中村氏の挙げた作品ないし他の作品と直接の典拠関係にあるのかもしれない。いずれにせよ、「せうと」の②・③場面は具体的創作材料がある部分ということになるのか。

以上、「せうと」が使用される部分には一定の傾向があり、それは、典拠作品の一つである『伊勢物語』との関連がある箇所限定されていた。また、②・③場面には、漢籍に典拠があるか、あるいは、何らかの創作材料を持つ可能性がある箇所ということになる。

7 むすびとして——②の「男」呼称部分における「法華経を書きて」

7-1 「せうと」偏在のまとめ

本稿では、『篁物語』における主人公・篁の呼称が、特に「せうと」と「男」との間で揺れている現象に着目し、特に「せうと」が使用されている場面の特徴を分析してみた。「せうと」が連続する

3箇所には、『伊勢』との関連が認められるという共通点があるという解釈を提示した。それは、『伊勢』との類似点をどのように、どの程度に見るかということも関わるので、②の場面はともかく、特に③の場面などは必ずしも明確な共通点と言えるほどではないかもしれない。その点は措くとして、強調しておきたかった点は、「せうと」3箇所の特異な偏りと、③の場面における種々の表現・語句の重複・繰り返しという不審箇所の問題である（「逆戻り」とも解釈されていた）。また、それらに加えて②・③における漢籍との関連性である。

①②③の3箇所の共通性を、上述のように探ってみると、『伊勢』とのこととは別にもう1点、共通性があることが見えてくる。最後にそのことを7―2で述べてみるが、その前に6節までの考察をひとまず次にまとめておく。

① aの部分9例は、兵衛佐が「男」と呼ばれるため、その直前まで「男」と呼ばれていた主人公・篁が「せうと」と呼び方を変えられてしまう段落であった。一方、「兵衛佐」（時の大納言の子）の場面における身分の高い男と身分の低い主人公（篁）という設定は、『伊勢』四十一段における「貴（あて）なる男」と「賤しき男の貧しき」の設定の影響を受けたものと推定された。

また、②の2例が使われていた場面は、「春の桶」場面での「緑の衣」は、同じく『伊勢』四十一段における「緑衫の上の衣」（六

位の朝衣を象徴）の設定を踏襲したものと推定された。この部分には漢籍の典拠があることも仁平（1995:12）によって指摘された。

また、③の2例の場面は、「葬送」場面、また、「消えない魂」という設定の上で、『伊勢』三十九段との近似性が指摘でき、かつ、漢籍における招魂の儀礼表現との類似は中村祥子（2006）によって示されていた。

①②③のいずれにおいても、『伊勢』との関連性が認められることになる。本稿では、これらの共通性から、「せうと」呼称の部分は、『伊勢物語』や中国漢籍などの他の作品を典拠の一つとして創作（ないし着想）された段階の痕跡であり、それらは「せうと」不使用の他の部分とは別の段階に構想された蓋然性が高い、と解釈した。これら①②③の部分は、安部（2028）で検討したように、取り除いても本文のストーリーの進行にはほとんど影響がない部分でもあった。

また① aでの「せうと」使用は兵衛佐が「男」と呼ばれたゆえの必然的結果であること、及び、その① aと②とが共に『伊勢』四十一段との共通性があることを考え併せると、① a（bも）と②とが構想された時期はほぼ同時期と考えるのが自然であろう。それらの点から考えて、③の部分の構想もそれらに近い時期になされて一緒に挿入されたものと推定しておくことができると思われる。

今後の課題としては、「男」部分と「せうと」部分とを統合して現『篁物語』に成す段階で、なぜ呼称を統一するまでに至らなかつ

たのか、という問題が残ることになる(注一)。

7-2 『法華經を書きて』と『書』(漢才)というテーマ

①②③の3箇所共通性を、上述のように探ってみると、「せう」との場面には、もう1つの共通性が見出せる。それは、安部(2018:5)において指摘した「漢学、漢文、漢籍」、即ち「漢才」に関わる語彙が一語も現れていない場面という点である。

安部(2018:5)において『篋物語』の話の内容を次のような5つテーマに大きく分類して把握し、そのうち、A『書』(漢学・漢文の学) 教養譚(複数の場面に断続的に分散)と呼んでまとめた場面に共通するのは、『書』(漢学・漢文・漢籍)による学問・教養(漢才)を示唆する語彙であることを指摘した(『書』は大系本での表記を借用したもの)。

- A 『書』(漢学・漢文の学) 教養譚(第一部および第二部)
- B 「妹亡霊譚」(第一部と、第二部の続編部)
- C 「兵衛佐横恋慕譚」

- + d 「師走の月夜」章段(短かい小段落)
- + e 「春の橘」章段(短かい小段落)

そのAの「書」(漢学・漢文・漢籍)による学問・教養を象徴するのは、本文中の次のような語彙・表現であった(安部(2018:5)より。なお、カッコ付番号は場面毎の区分を示す)。

第一部 (1)「才のかぎりしつくして」「書読ません」「読ませけ

る」「角筆して」「才」は漢学の学才である)

- (2)「書読ませざりければ」「書かき集めて」「角筆して」「物*の書は」「読み聞きてよろづの書は」

——【*原文「初の書」とあるのを改めた】

- (3)「例の書読みに、「親は書を教ふるなりけり。」
- (4)「末尾」「書読む心ちもなし。」(第一部はここで「書」章段群が途切れる)

第二部 (1)「文おもしろく作りて」「文の帙取りて」「文巻を奉

れば」

- (2)「才学はさうにも言わず」「才」「文作る人は」

これらの語彙は、B「妹亡霊譚」、C「兵衛佐横恋慕譚」、d「師走の月夜」章段、e「春の橘」章段には、一切、一度も使用されることがない、という特徴を示す。

改めて、「せうと」使用という観点から見ても、「せうと」部分にはこれらの語彙が一度も現れていないことに気付く。そのことは、安部(2018:5)にて、上記Aのテーマの部分と、B C + d eのテーマの部分との異質性の一つとして指摘したが、呼称という視点の側から改めて見てみると、「せうと」部分は少なくともこのA『書』(漢学・漢文の学) 教養譚部分とは異質のものであると解釈される。これも「せうと」部分のうち1つの共通性ということになる。そしてこのことは、おそらく「せうと」部分は、A部分とは創作段階(あるいは構想段階)を異にすることに起因すると思われる。

ところで、安部(2018:5)では、A『書』(漢学・漢文の学)教養譚」は、右に第一部(4)としてあげた妹の懐妊場面(「春の橋」段落の直前)の末尾にある「書読む心ちもなし。」で、「第一部はここで「書」章段群が途切れる」と解釈した。しかし、「せうと」呼称のC場面の直後、第一部は再び「男」に戻って終わっている。本稿での考察を踏まえるなら、その「男」に戻った末尾部分は「せうと」場面とは質的に別であるはずである。そのことを示す「書(漢才)」を象徴する語彙があつてよい(あるべきである)ことに今回気付かされた。いま改めて見てみると、「この男、涙つきせず泣く。その涙を硯の水にて、法花経を書きて」とあつて、「経典が書ける」ことそのものが『書』(漢学・漢文の学)による教養」があることの証しであることに気づく。ここが「このせうと」、法華経を書きて」とは書かれていないことを重視したい。

ここに、法華経を写す末尾部分で「男」の呼称が使われていることの意味を、このように解釈し、前稿(安部2018:5)を次のように修正しておきたいと思う(この「漢才」というテーマで第一部・第二部とも一貫していると解釈されるので、カッコ付番号も今回通し番号としておくことにする)。ここにも、「せうと」呼称部分と「男」呼称部分との相違が現れていると考えられる。

第一部 (1)「才のかぎりしつくして」「書読ません」「読ませける」「角筆して」「才」は漢学の学才である)

(2)「書読ませざりければ」「書かき集めて」「角筆して」「物*の書は」「読み聞きてよろづの書は」
——【*原文「初の書」とあるのを改めた】
(3)「例の書読みに、」「親は書を教ふるなりけり。」
(4)「書読む心ちもなし。」
追加 (5)「法華経を書きて」
第二部 (6)「文おもしろく作りて」「文の帙取りて」「文巻を奉れば」
(7)「才学はさうにも言わず」「才」「文作る人は」

以上、『篁物語』における呼称「せうと」の使用場面から、その段落構成と形成過程とを考えてみた。『篁物語』の語彙・表現を、一連の拙稿のように半ば記号的に分析していくと、一定の論理的規則的使い分けルールに従っているかのような構造が現れてくる。ある意味、きわめて単純明快な構成を見せられるといえよう。そしてその点から言うと、このような分析をしながら感じる『篁物語』の作者像は、従来から言われているように漢文学的世界に属する男性知識層ではあるが、それだけではなく、文学者の面よりも、むしろ、本稿執筆者の領域にも近い、より国語学・言語学の感性がまさつた人物なのではないか、と感じられてくるのである。

【注】

- 1 ① a の部分は兵衛佐との関係上、篁の呼称は「せうと」で問題ないこと、および、③の部分はやや未整理であることを考え併せると、① a b ② ③を他の先行部分と統合した後に、② ③での「せうと」を「男」に直さないままに残った（直さないままに残るに至った事情が生じた）、という解釈を、いまはとっておくことにしたい。

【資料】『篁物語』の「せうと」のある場面（岩波書店・日本古典文学大系による。一部、便宜のため表記を漢字などに改めた。「兄」は「せうと」を表す。）

◆① a 「兵衛佐横恋慕譚」（仮称）（前半「如月初午の稲荷詣」＋後半「兵衛佐懸想文」）計 9 例——『伊勢物語』四十一段

さて、この女、願ありて、如月の初午に、稲荷に詣りけり。
 供に、人多くもあらで、おとな二人・童二人ぞ、ありける。おとなはいろ／＼の袿、二人は同じ色をなん、着たりける。君は、綾のかい練りの単がさね、唐のうすものの桜色の細長着て、花染めの綾の細長をりてぞ、着たりける。髪はうるはしくて、たけに一尺ばかりあまりて、頭つきいと清げにて、顔もあやしく世人には似ず、めでたくなんありける。男（を）の童三四人、さては、この兄せうととぞ、ありける。ませにはあらねど、先立ちをくれて来ける。詣でぎまに困じにければ、兄せうととおかしがりて、

「篁にかゝり給へ」

とて寄りければ、

「いで、いな／＼」

と言ひて、道中に去にけり。

さる程に、兵衛佐ばかりの人、かたち清げにて年廿ばかりなりけるが、詣であひて、かへさに、女の道にゐたる、

「あな、くるし。かくてやは、出で立ち給へる」。

もの嫉みして、男【兵衛佐】申に、

「かしは車作りて、このわたりなる木さきの屏にすへ奉らん。女的身には大王、みかどには誰をかをと」

と言ふ程に暮れぬれば、【兄は】わりごさがして食はせんとするに、この佐すけをやりすぐす。この男【兵衛佐】、休むやうにて、降りて、

人知れぬ心たゞすの神ならば思ふ心をそらに知らなん

返し、

社にもあだきねすゑぬ石神は知ること難し人の心を

またもおこせけれど、この兄せうといそがして、車に乗せて、あて去ぬ。

この佐、人をつけて、

「いづくにか、率て去ぬる」

と見せければ、

「その家」

と見てけり。あしたに、文あり。

「神の教へ給しかばなむ、さして奉る。かの石神の御もとにて、今

日あらば。」

文を取り入れて見れば、この**兄**、出で走りて、

「父ぬし聞き給に。いともの騒がしう。この童はいづくから来たるに。いづれのすぎ者の使ひぞ。」

と言ひければ、

「御文は奉らせつれど、昨日いませしぬしの、『いづれの使ひぞ』との給を、うちからは翁びたる声にて、『なにごとぞ』などの給つれば、わづらはしきになむ、参で来ぬる。」

と言ひければ、

「とうめの童や。」

と言ひて、またのあしたに、

「昨日の御返。たびく、いとおぼつかなし。この童の、あとはかなくて参で来にしかば。」

あとはかもなくやありにし浜千鳥おぼつかなみに騒ぐところか」

この**兄**、大学に出でにけり。樋洗童、取り入れて奉る。文をも取り、

「大学の主もふみつくる。近からん、人の家にすゑよ。」

とて、

「昨日も見しかども、いさや。」

たまぼこの道交るなりし君なればあとはかもなくならず知らずや」

見て、

「ざれたるべき人かな。うたて、まがくしうもいりたるかな。いかに言はまし」

と思ふ。時【時の】、大納言の子なりけり。

「あとはかもなくしと、誰も。道にこそみ給へりしか。

しばくにあとはかなしと言ふことも同じ道には又もあひなん」

また、これをれいの童、もて来たり。**兄**、道にさしあひて、

「今これより」

と言ひて、やりてけり。

「かく」

など言へば、

「れいの、心肝もなき童かな。先にけしきあしう言ひけむ人にや、取らすべき。この稲荷にて、まならひものしげに思へりし者ぞや。」

男【兵衛佐が篁を指している】よりのものぞや。そもそも、御返とりてやりつ。

『御返りにくし』

と思ふものゝやうに、**兄**、出であひて、

「御文奉り給人は、夜べ男【架空の男】にぬすまれたまひしかば、求めにゆくを。もし、この御文給へる人とも知らず。うち率ていけ」

と言ひければ、しりへ答ゑに答へて、走りにけり。

『さもあらん』

と思ひて、文もやらずなりにけり。

女、**兄**のはかりたるとは知らで、

『あやしうをとづれぬ』

と思をり。この**兄**、れいのごとあるなり。

「道あひの、知りも知らぬ人に、文かよはし懸想じ給、人の御心こそありけれ。かの人は、御妻にやがてあはせ奉らん。仲人こそよからめ。ゆるされたまはでは、不用ぞ」

など言ひければ、

「なでう、目にかつかん。いかに知りてか、ともかうも思はん。」

「世を知らざらん人は、さやうにも言はでこそあらめ。見つかずの御ありさまや。心うしと。思はずなり」

など言へば、妹とおしうて、

「なにか、目にちかざらん人を、しひも見給へと、思はん。」

とて、入りにけり。

◆①b 「妹懐妊段落」の冒頭部1例(①aの直後で、①に続く場面の冒頭部。「せうと」1例の直後は「男、言ふよう」と「男」に変る)

例の書読みに、

『内侍になさん』

の心ありて、親は書教ふるなりけり。文かよはしにはしゝたれど、

この**兄**、心をまどはして、思ひ出でられけり。**男**、言ふやう、

「かく思ひ出でられ、かぎりなき心を思知らずして、よそなる人を

思ひたまへるこそ、つらけれ。」(下略)

◆② 「春の橘」章段2例——『伊勢物語』四十一段「緑衫の上の衣」(および『蒙求』の「陸続懐橘」)

「例の、さはりせず」

など、うたてあるけしきを見て、人／＼言ふ。この**兄**も、

「いとをし」

と見て、春のことにやありけん、ものも食はで、はなかうじ・橘をなむ、ねがひける、知らぬ程は、親求めて食はせ、**兄**、大学のある

じするに、

『みな取らまほし』

と思ひけれど、二三ばかり、たゝみ紙に入れて、取らす。

あだに散る花橘のほひには緑の衣の香こそまさらめ

「これをきこしめすなればなん」。

返事に、

「御ふところによりければなん、

似たりとや花橘をかぎつければ緑の香さへうつらざりけり」

◆③第1部終結部「妹亡霊譚」の中の供養の場面2例（親に代わって葬送をするためだろうか、身内としての「兄」〔2例〕が現れ、この場面で「兄↓兄↓男」と変化して、「兄」の最後の使用が終わる。）

親はすてて去にければ、とかくおさむることは、たゞこの兄せうとぞ、しける。

人はみな、すててゆきにければ、たゞこの兄せうと、從者三人・学生一人して、この女を死にける屋を、いとよくはらひて、花・香たきて、遠き所に、火をともしてみれば、この魂なん、夜なく来て語らひける。

三七日は、いとあざやかなり。
四七日は、ときく見えけり。

この男、涙つきせず泣く。その涙を硯の水にて、法華經を書きて、比叡の三昧堂にて、七日のわざしけり。その人、七日はなしはてても、ほのめくこと絶えざりけり。

三年すぎては、夢にも、たしかに見えざりけり。なを悲しかりければ、初めのごとしてなん、まかせたりける。妻にも寄らで、ひとりなん、ありける。

【第1部終り】

【参考文献】

- 山口 博 (1967) 『篁物語論』『王朝歌壇の研究——村上冷泉円融朝篇』桜楓社 (初出は1957年および1965年の論叢等)
- 阿部俊子 (1969) 『歌物語とその周辺』風間書房
- 石原昭平・根本敬三・津本信博 (1977) 『篁物語新講』武蔵野書院
- 呉羽 長 (1986) 『篁物語』『泣き流す』の歌下句の想定』『解釈』32—7
- 平野由紀子 (1988) 『小野篁集全釈』(私家集全釈叢書3)、風間書房
- 中村祥子 (1995) 『篁物語』第二部の発想についての私見——『世説新語』賢媛伝とのかかわり——『日本語日本文学』21 (台湾・輔仁大学)
- 仁平道明 (1995.12) 『篁物語』の結婚譚と『孔子家語』『むらさき』32、後に仁平 (2000) 『和漢比較文学論考』武蔵野書院に再録、いま後者による。
- 森中京子 (1996) 『兄』『学生』という語のイメージ——『篁物語』小考』『緑岡詞林』20 (青山学院日文院生の会)
- 安部清哉 (1996.3) 『言葉・語法史から見る資料——『篁物語』の成立時期をめぐる——』『国語学』184
- 村田菜穂子 (2005) 『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』笠間書院
- 中村祥子 (2006.7) 『生死を隔てた邂逅——『篁物語』と「李章武伝」——』『2006年中国文化大学中日社会與文化学術検討会論文集』(台北市・中国文化大学日本語文学系所出版・発行) (招魂の儀式のこと)
- 中村祥子 (2007) 『篁物語』における三の君結婚というモチーフ (副題略) 『日本語日本文学』32 (台湾・輔仁大学)
- 中村祥子 (2009) 『古今歌と『篁物語』——八・二九番歌から紡がれた物語——』工藤進思郎先生退職記念の会 (編) 『工藤進思郎先生退職記念論文・随想集』工藤進思郎先生退職記念の会 (泣く) 『涙』表現との関係

- 安部清哉 (2017.3) 「原『篁物語』の作者・成立年と源順および河原院歌壇沈淪歌人群の長歌・和歌——九六一年から九八〇年頃か——」『学習院大学文学部研究年報』63
- 安部清哉 (2018.3) 『伊勢物語』三十九・四十・四十一段と源順——『篁物語』第一部・第二部共通の二典拠章段として—— 学習院大学人文科学研究所『人文』16
- 安部清哉 (2018.5) 「挿入段落・附載説話という視点から見た『篁物語』の構成と形成——残る断続場面の「ふみ(書Ⅱ漢字)」という主題——」『学習院大学教職課程年報』4
- 安部清哉 (2018.6) 「係り助詞(ナム・ゾ・コソ)の四文体別変遷史から見た『篁物語』——源順原作説とも照らしつつ——」『国語と国文学』95—6
- 安部清哉 (2019.3) 「贈答歌と会話と段落構成から見た『篁物語』という「つくり歌物語」の創出」『文学部研究年報』65

【付記1】安部 (2018.3) についで、『篁物語』の典拠の一つとして『伊勢物語』41段(および39・31段)が使用されていることを、源順の語彙「緑の衣」(41段)と祖父・源至(39段)とを糸口としながらたどり、それらの間にある40段に関する先行の指摘(藤田徳太郎(1930)、後藤丹治(1936))を見出して、改めて40段を一つの典拠と解釈した。今回、校正時、次の平林文雄(1991)においても、40段を典拠として挙げていることを見出したので、ここに報告しておく。40段(ついでに、これまでも『篁物語』と類似する作品として、『宇津保』『落窪』)他が挙げられている中であって、(継)子虐め譚の表現の類似として、母親による子供の幽閉部分での類似が指摘をめぐらさるから(阿部俊子(1989))が早い指摘としてあるが、詳しくは機会を改め、それゆえ、おそらくその延長線上での典拠指摘かと推察する。ただし、

平林(1991)には、最も早いこれら藤田・後藤二つの先行研究への言及はなく、また、40段との類似点の指摘内容も拙論とは一部異なっている。機会を改めて詳述したい。(論集中に所収の論文のため気づくのが遅れた。)

藤田徳太郎(1930)『平安朝物語選要』明治書院
後藤丹治(1936)『篁物語新考』『国語国文』6—10
平林文雄(1991)『篁日記』『小野篁記』『小野篁集』『篁物語』の典拠『日本文学思潮論』桜楓社

【付記2】本稿は次の研究費による研究成果の一部でもある。日本学術振興会科学研究費2017-2019年度基盤研究(C)(基金)、課題番号:17K02785(代表:安部)

ENGLISH SUMMARY

A Study on The Composition of Paragraphs of “The Tale of Takamura” (『篁物語』) Seen from “The Tale of Ise” (『伊勢物語』) and The Personal Pronoun “Seuto” for the Hero,

ABE Seiya

Abstract: In this thesis, the aim is to elucidate the usage of the name of the main character in “The Tale of Takamura” (『篁物語』). In this story, five words of “Seuto” “Oroko” “takamura” “daigaku no nushi” “hito” are used for the hero “Takamura”, but focused on “Seuto” and “Oroko” which is particularly used in many cases.

“Seuto” is used in a position complementary to “Oroko” and appears in three places. In this tale, “Seuto” is always used more than once in a row. The part where “Seuto” is used is divided into three parts. In these three parts, “Seuto” is used 10 times, twice, twice, respectively. Especially “Seuto” appears

in a series of scenes. Moreover, it is limited to a certain part related to “The Tale of Ise” (『伊勢物語』) which is one of the authority works.

From the viewpoint of these characteristics, it seems that the part of “Seuto” was conceived at the stage after formation, a little later. At first, the part where “Otoko” is used was created. After that, “Seuto” was used in the three parts based on “The Tale of Ise”, it was inserted in the part of “Otoko”. As such, it was considered that the two parts where these different personal pronouns are used were integrated and the whole was formed.

Key Words: “The Tale of Takamura”, “The Tale of Ise”, “Seuto”, the composition of paragraphs, personal pronoun